

マルクスの「資本の過多Plethora of Capital」 概念の源流を求めて

松 尾 純

I. はじめに

現行版『資本論』第3部第3篇第15章第3節「人口の過剰に伴う資本の過剰」には、マルクスの恐慌論の方法を解明するうえで最重要な手掛かりであると考えられる「資本の過剰生産」概念が提示されているが、前稿¹⁾において、筆者は、この「資本の過剰生産」概念に関連させてマルクスが言及している「資本の過多Plethora of Capital」概念を、『資本論』とその準備草稿²⁾の執筆過程において、マルクスが如何に彫琢していったかということを追跡する作業を行った。

この作業によって、マルクスが「資本の過剰生産」を議論する際、たびたび閑説・言及している<「資本の過多」とは何なのか>という問題を、正面から取り上げ考えてみようとした。ただし、前稿での研究作業においては、敢えて論点を簡明にするために、関連する多くの探求すべき論点に深入りせずに、マルクス自身の論述（地の文）にだけ即して、『資本論』とその準備草稿における「資本の過多」概念の形成過程を明らかにしようとした。

1) 拙稿「マルクスの『資本の過多Plethora of Capital』概念の形成」『経済経営論集』（桃山学院大学）第54巻第2号、2012年10月。

2) *Karl Marx/Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, Abt. II, Bd. 1~15: 1-1, 1976; 1-2, 1981; 2, 1980; 3-1, 1976; 3-2, 1977; 3-3, 1978; 3-4, 1979; 3-5, 1980; 3-6, 1982; 4-1, 1988; 4-2, 1992; 4-3, 2012; 5, 1983; 6, 1987; 7, 1989; 8, 1989; 9, 1990; 10, 1991; 11, 2008; 12, 2005; 13, 2008; 14, 2003; 15, 2004, Dietz Verlag (2003年以後はAkademie Verlag)。

キーワード：『資本論』、資本の過多, plethora, John Fullarton, 『通貨調節論』

そこで、本稿では、「資本の過多」概念の起源・由来を解明するための糸口を確認する作業を行いたいと考える。その作業をすることによって、マルクスが「資本の過多plethora of capital」という用語・概念を使用し始めた際、それを彼は、誰から、また何処から、そしてどのような問題を継承しようとしていたのかということを解明することができるであろうと考える。

Ⅱ. 『資本論』とその準備草稿におけるマルクスの「資本の過多」概念

問題探求の端緒として、『資本論』とその準備草稿においてマルクスが「資本の過多」なる用語・概念をどのように使用し始めているかをまず簡単に確認する作業を行うことにしよう。マルクスは、『資本論』とその準備草稿の数多くの箇所では、「資本の過多」なる用語・概念に言及し、それを使用しているが³⁾、彼がこの用語を誰から借用し・継承しているのかを敢えて指し示す彼の論述に注目し、その内容を確認する作業をすることにしよう。

マルクスが最初に、『資本論』の準備草稿において、他者からの引用ではなく、彼自身の記述として、「資本の過多」という用語を使用しているのは、「1861-63年草稿」⁴⁾ノートXVI記載の草稿「第3章 資本と利潤」においてである。そこには、以下のような記述が存在する。

①「それでは、このような一般的利潤率の低下傾向は何が原因で生じるのか？この問題に答える前に、われわれは、この低下傾向がこれまでブルジョア経済学の大きな不安の種になってきたことを指摘しておくことができる。リカードウ学派やマルサス学派の全体は、この過程がひき起こすにちがいないであろう最後の審判の日のために悲痛な叫び声をあげている。というの

3) 同上拙稿において、『資本論』とその準備草稿におけるマルクス自身による「資本の過多」概念の使用例を、ほぼ網羅的に引用・紹介している。参照していただきたい。

4) Karl Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie (Manuskript 1861-1863)*, in : *Karl Marx/Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, Abt. II, Bd. 3, Teil 1-6, Dietz Verlag. 以下、この書から引用する際は、MEGA II-3-5等と略記し、引用箇所を、引用ページとその邦訳（『マルクス資本論草稿集』④⑤⑥⑦⑧⑨、大月書店、1978、1980、1981、1982、1984、1994年）ページを、例えば、次のように略記して示す。MEGA II-3-5, S. 1633：草稿集⑧145頁。

は、資本主義的生産は利潤の生産なのだから、この利潤が減少するにつれてその生産の刺激やその生産の生き生きとした魂を喪失することになるからである。これにたいして、他の経済学者たちは、負けず劣らず特徴的ないろいろな慰めになる理由をこれまでにもちだしてきた。ところが、理論と並んで実際に現われるのは、資本の過剰 (superabundance of capital) から生ずる恐慌であり、または同じことになるが、利潤率低下の結果として資本が踏み込む無謀な冒険である。このことから、恐慌が、——フラートンを見よsee Fullarton——資本の過多 (plethora of capital) を救済して健全な利潤率を回復するために必要な暴力的手段として認められている恐慌が、起こるのである」⁵⁾。

②「こうした利潤率の低下につれて、労働を生産的に充用するために一般に必要とされる資本の最小限——または資本家の手になければならない高さの生産手段の集積——は増大する。この最小限は、労働を搾取するためにも、また、ただ生産物を生産するために社会的に必要とされる必要労働時間を充用するためだけでも、必要なのである。それと同時に蓄積も、すなわち集積も増大する。というのは、利潤率の低い大資本のほうが利潤率の高い小資本よりも急速に蓄積を進めるからである。この増大する集積は、それ自身また、ある一定の高さに達すれば、再び利潤率の新たな低下をひき起こす。そのために、より小さな分散した諸資本の大群はわれ先に冒険〔の道へ駆り立てられる〕。このために恐慌〔へと追いこまれる〕。いわゆる資本の過多 (Die s. g. Plethora des Capitals) は、いつでもただ、利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本の過多 (Plethora von Capital) にだけ関連している。(フラートンを見よ。Sieh Fullarton)」⁶⁾。

この草稿箇所よりも後に執筆された「1861-63年草稿」ノートVI～XV部分のノートXⅢ部分においても、「資本の過多」への数多くの言及・使用例

5) MEGA II-3-5, S. 1633: 草稿集⑧145頁。

6) MEGA II-3-5, S. 1640: 草稿集⑧158頁。

が存在するが⁷⁾、本稿の目的に照らして確認すべき箇所は、次の論述箇所である。

③「彼ら[リカードウの後継者たち]は、…資本の過多と過剰生産 (*plethora of capital und overproduction*) という、まことに結構な区別を考え出したのである。過剰生産にたいしては、彼らは…反対しながら、一方、資本の過多から…諸現象を演繹しようとする。たとえばウィルソンは、二、三の恐慌を固定資本の過多 (*Plethora von fixem Capital*) から説明し、他の恐慌を流動資本の過多 (*Plethora von circulirendem Capital*) から説明している。資本の過多 (*Die Plethora des Capitals*) そのものは、最もすぐれた経済学者たち (たとえばフラートン) によって主張され、すでに、この言葉が大学者ロッシヤー先生の概論のなかでさえ自明なものとして再現しているほどの不動の先入観になっている」⁸⁾。

この記述箇所から少し時間を隔てて執筆された『資本論』第3部草稿のエンゲルス編集・第3篇第15章第3節相当部分の冒頭においても、マルクスは、「資本の過多」という用語の使用・言及を行っているが、「資本の過多」という用語の源流を探求するという本稿の目的に照らして参照すべきは、次の箇所である。

④「利潤率の低下…につれて、…資本の最小限…は増大する。…それと同時に集積も増大する。…この増大する集積は、それ自身また、ある高さに達すれば、利潤率の新たな低下をひき起こす。したがって、分散した小資本の大群は冒険の道に追いこまれる。投機、信用思惑、株式思惑、恐慌へと追いこまれる。いわゆる資本の過多 (*Die s. g. Plethora des Capitals*) は、つねに根本的には、利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本——そして新たに形成される資本の若枝はつねにこれである——の過多 (*Plethora von*

7) 筆者は、かつて、「1861-63年草稿」ノートXⅢ(『剰余価値学説史』第17章)におけるマルクスの過剰生産論を詳しく分析したことがある。拙稿『『剰余価値学説史』における過剰生産論—第17章の分析を中心に—』『山形大学紀要(社会科学)』第11巻第1号、1980年7月。

8) MEGA, II-3-3, S. 1121: 草稿集⑥700頁。

Capital) に、または、このようなそれ自身で独自に行動する能力のない資本を大きな事業部門の指導者たちに（信用の形で）用だてる過多Plethoraに、関連している。このような資本過多（Plethora des Capitals）は、相対的過剰人口を刺激するのと同じ事情から生じるもの…である。といっても、…一方には遊休資本が立ち、他方には遊休労働者人口が立つのであるが⁹⁾。

『資本論』第3部草稿では、さらに、その第5章部分でも、「資本の過多plethora of capital」への言及が多数存在するが、ここでも、「資本の過多」という用語の源流を探求するという本稿の目的に照らして参照しなければならない記述部分は、次の箇所である。

⑤「Ⅲ」いまやわれわれが近づいてゆく信用という事柄全体のなかでも比類なく困難な問題は、次のような問題である。——第1に、本来の貨幣資本の蓄積。これはどの程度まで、現実の資本蓄積の、すなわち拡大された規模での再生産の、指標であるのか、またどの程度までそうでないのか？いわゆる資本の過多Die s. g. Plethora of capital（この表現は、つねに貨幣資本について用いられるものである）は、過剰生産と並ぶ一つの特異的な現象であるのか、それとも、単に過剰生産を表現するための一つの特異的な仕方にすぎないのか？貨幣資本の過剰供給は、どの程度まで、停滞しているもろもろの貨幣量（鑄貨、地金または銀行券）と同時に生じ、したがって貨幣の量の増大で表現されるのか？¹⁰⁾。

以上5つの引用文のうち、引用文①～③には、「資本の過多」という用語の借用・継承元の人物名が登場するので、関係箇所として引用するのは当然

9) Karl Marx, *Ökonomische Manuskript 1863–67*, in : *Karl Marx/Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, Abt. II, Bd. 4, Teil 2, 1992, Dietz Verlag. 引用に際しては、引用箇所を、この書の引用ページと、それに対応するMEW版『資本論』（Karl Marx, *Das Kapital*, MEW, Bd. 25, Dietz Verlag, Berlin, 1964）およびその邦訳（岡崎次郎訳『資本論』大月書店、国民文庫版[6]）のページを、次のように略記して示す。この箇所について言えば、MEGA, II–4–2, S. 324–325 : MEW, Bd. 25, S. 261 : 『資本論』(6), 409–410 頁。

なお、訳文については、現行版と「主要草稿」の対応関係が理解しやすいように、現行版『資本論』の訳文を利用し、原文が異なる場合だけ新たな訳文を当てた。

10) MEGA, II–4–2, S. 529 : MEW, Bd. 25, S. 493 : 『資本論』(7), 284–411 頁。

であるが、それ以外の引用文④⑤をあげたのは何故かといえ、その箇所での「資本の過多」という用語の前に、「いわゆるDie s. g.」という言葉が付加されているからである。「いわゆるDie s. g.」という言葉は、周知のように、「世間で言われている。俗に言う。」という意味であり、使用する言葉・用語が自分由来・造語でないことを明示するために使用される言葉である。したがって、この「いわゆる」という言葉をマルクスが使用しているということは、「資本の過多」という用語は自分（マルクス）由来の言葉・自分の造語ではないことを敢えて明示しているということである。そういう理由で、引用文④⑤を参考文献として引用しておいた¹¹⁾。

Ⅲ. マルクスによる「資本の過多」という用語の使用の起点

以上において、『資本論』とその準備草稿においてマルクスが「資本の過多」という用語をどのように使用し始め、言及し始めたかということを確認する作業を行ったが、それによって、直ちに、「資本の過多」という用語をマルクスが誰から・何処から、継承し、使用し始めたかを知るヒントを得ることができたように思われる。というのは、上記5箇所の引用文中の3箇所で、マルクスは「資本の過多」という用語を使用する際、それを誰から・何処から継承しているかを敢えて明示するかのよう、ジョン・フラートン

11) 本稿執筆中に、筆者は、大谷禎之介著『マルクスの利子生み資本論』（全4巻）、桜井書店、2016年6月10日発行を入手したが、その第3巻（「信用制度化の利子生み資本」）には、大谷氏による拙稿「マルクスの『資本の過多Plethora of Capital』概念の形成」『経済経営論集』（桃山学院大学）第54巻第2号、2012年10月への次のような批評が見られる。すなわち、「じつは、松尾氏の以上の結論の妥当性を云々する以前に、氏の問題設定そのものが一つの大きな誤解にもとづくものだったことを指摘しなければならない。すなわち、氏の論稿から明らかに読み取れるのは、『資本の過多Plethora of capital』とは、マルクスが分析によって理論的に把握したものにマルクス自身がそのように命名した一つの理論的概念なのだ、と氏が固く思い込まれており、この思い込みのうえで氏はマルクスの記述から、マルクスがこの『概念』をどのように『概念規定』しているか、その『概念規定』がどのように深化していったのか、を追跡する、という作業をされたのだ、ということである。」（282頁）。

本稿を通じて筆者が明らかにしたいと思っていることの一つは、「資本の過多」とはマルクスが「命名した一つの理論的概念」であるという「思い込み」を、筆者を含む誰も持ちようがないということである。

(John Fullarton, 1780-1849) の名前を挙げているからである。この観点から、注目すべき記述箇所だけを念のために繰り返し引用しておく、次のような件の記述である。

引用文①では、「このことから、恐慌が、——フラートンを見よ——資本の過多 (plethora of capital) を救済して健全な利潤率を回復するために必要な暴力的手段として認められている恐慌が、起こるのである」。

引用文②では、「いわゆる資本の過多 (Die s. g. Plethora des Capitals) は、いつでもただ、利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本の過多 (Plethora von Capital) にだけ関連している。(フラートンを見よ。)」。

引用文③では、「資本の過多 (Die Plethora des Capitals) そのものは、最もすぐれた経済学者たち (たとえばフラートン) によって主張され、すでに、この言葉が大学者ロッシヤー先生の概論のなかでさえ自明なものとして再現しているほどの不動の先入観になっている」。

これらの記述から、マルクスは「資本の過多」という用語をジョン・フラートンから借用・継承し、使用し始めていることは明かである。そこで、もう少し具体的に・内容に立ち入って探求すべきは、フラートンのどのような議論の展開・論述から、マルクスは「資本の過多」という用語・概念を引き継ごうとしているのかということである。

この点については、MEGA編集者は、MEGA第Ⅱ部第3巻第5分冊の注解 (MEGA, II-3-5, Apparat, 1980) において、フラートンによる「資本の過多」について論述している箇所を指し示してくれているので、それを参考にすることができよう。すなわち、「ジョン・フラートン『通貨調節論・・・』, ロンドン, 1844年, 161-166ページ, 特に165ページ¹²⁾。/これ

12) John Fullarton, *On the Regulation of Currencies*, 1844. (ジョン・フラートン『通貨調節論』, ロンドン, 1844年, 165ページ[福田長三譯『通貨論』岩波文庫, 昭和16年, 214-215頁。翻訳は第2版原書1845年からの訳本])。

以下、引用に際しては、引用箇所を、訳本ページとそれに対応する初版原書ページを、引用文末尾に、次のように略記して示す。例、(訳, 215頁; p.165)。

本稿において使用する訳本では、旧仮名遣い・旧漢字が使用されているが、訳文の引用に際しては、旧仮名遣いはそのまま使用し、旧漢字は新漢字に変更して引

に一致する指摘やそのための詳論は、とりわけ、『要綱…』(MEGA, 第2部第1巻第2分冊, 713ページを見よ), 『引用ノート』の74ページおよび手稿ノート第XⅢ冊(MEGA, 第2部第3巻第3分冊, 1118-1122ページを見よ)のなかに見られる」¹³⁾。

しかし、このようなMEGA編集者の注解を待たずとも、フラートン著『通貨調節論(John Fullarton, *On the Regulation of Currencies*, 1844)』を直接参照すれば、直ちにマルクスが「資本の過多」なる用語を彼の著書のどの箇所から引き出し、使用し始めているのかということを明確にわれわれは知ることができる。というのは、フラートン著『通貨調節論』には、「[資本の]過多plethora[*of capital*]」(本稿で使用する翻訳本では「過剰」と訳されている——本稿注12を参照)は、ただ1回だけ、原書(初版, 1844年) p. 165に出現するからである。それは次のような記述である。

「まことに、ヨリ最近の事例を一瞥すれば、人々は、週期的な資本の破壊が、とにもかくにも市場金利といふものが存在するための缺くべからざる一条件となつたのではないかと疑ひたい気がするであらう。だから、この点から考察するならば、われわれがこれまでかくも多大の不安と懸念をもつて待機し、それを回避すべくかくも切望してゐるこれらの恐るべき資本の破壊も、その実は、成長しすぎて脹れ上つた豊満状態にたいする自然的にして必然的な矯正物——換言すれば現に組織されてゐるやうなイギリスの社会制度が、それによつてその存立を脅かす絶間なき過剰plethoraを常に一掃し、健全なる状態を取り戻しうるところの矯正力vis medicatrix以外のなにものでもない。(“From more recent events, indeed, one would almost be tempted to suspect, that a periodical destruction of capital has become a necessary condition of the existence of any market rate of interest at all. And, considered in that point of view, these awful visitations, to which we are accustomed to look forward with so much disquiet and apprehension, and

用することにする。

13) MEGA II-3-5, Apparatus, S. 77: 草稿集⑧145-146頁。

which we are so anxious to avert, may be nothing more than the natural and necessary corrective of an overgrown and bloated opulence, the vis medicatrix by which our social system, as at present constituted, is enabled to relieve itself from time to time of an ever-recurring plethora which menaces its existence, and to regain a sound and wholesome State.” (p.165. Fullarton (John) : On the regulation of currency etc. Lond. 1844.)¹⁴⁾ (訳, 214-215 頁 ; p.165)。

マルクスは、恐慌は「資本の過多（プレトラ）（plethora of capital）を救済して健全な利潤率を回復するために必要な暴力的手段」であるという認識を、フラートン著『通貨調節論』のこの記述のうちに見出したと思われるが、実は、この引用文に先行して執筆された（「1857-58 年草稿」ノートⅦ・50 ページ）ですでに、マルクスは、フラートン『通貨調節論』の記述を引用・紹介している¹⁵⁾。彼は、引用文①の箇所を改めて、利潤率の傾向的低下法則論に関連して論述された「資本の過剰生産」論に関連させる形で「資本の過多」という用語・概念を持ち出すことになったと思われる。したがって、「資本の過多」という用語・概念のマルクスによる借用・使用の起点は、少なくとも彼自身にとっては、明らかであったと思われる。それは、MEGA 編集者の注解を待つまでもなく、フラートン著『通貨調節論』の上記記述箇所であると断言できよう。

14) この引用文末尾に出現する「plethora」は、『資本論』の現行翻訳本では、「過多」と訳されているが、本稿で使用する『通貨調節論』の訳本では、「過剰」と訳されている。多少の混乱は生じるかもしれないが、本稿では、それぞれの訳本の訳語をそのまま使用する。

15) Karl Marx, *Ökonomische Manuskripte 1857-58 in: Karl Marx/Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, Abt. II, Bd. 1, Teil 2, 1981, Dietz Verlag, S. 713 : 『マルクス資本論草稿集』②大月書店, 1993 年, 749-750 頁。
この草稿よりもずっと前に作成されたマルクスの抜萃ノートにも、フラートン著『通貨調節論』からの同じ箇所の記述が抜萃されている。Karl Marx, *Londoner Hefte 1850-1853. Heft I*, Karl in : *Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, IV-7, *Exzerpte und Notizen September 1849 bis February 1851*, 1983, S. 50.

Ⅳ. 『通貨調節論』におけるフラートン通貨論の基本的立場

以上の分析によって、マルクスによる「資本の過多」という用語・概念の借用・使用の起点は、フラートン著『通貨調節論』の上記引用箇所（原書、p.165）に登場する「過多plethora」であることを確認することができるが、しかし、さらに立ち入って明らかにすべきは、フラートンはどのような議論の展開過程においてこの「plethora」という用語を使用しているのかということである。

そこで、以下、この点を明らかにするために、『通貨調節論』全体を通じて、フラートンはどのような議論を展開しているのか、そして、その議論の延長線上に、結果として、なにゆえに・どのようにして「plethora」という用語を使用した議論を展開しているのかということを、あくまでも、彼の叙述に即して、明らかにしていく作業を進めて行くことにしよう。

ジョン・フラートンが『通貨調節論』を著した目的は、そのサブタイトルに明記されている。すなわち、「イングランド銀行および全国の諸銀行の銀行券発行高を将来一定限度内に制限せんとする提案の基礎たる通貨原理にたいする一検討」（訳、13頁）、と。このサブタイトルの意味を少し敷衍すれば、次のように理解できよう。すなわち、《銀行券の過大発行が物価騰貴の原因であるとし、それを防ぐために銀行券発行総量を一定限度内に制限しようとする通貨学派（currency school）の提案》、《いわゆるピール銀行条例案》を批判するために、その基礎理論をなしている通貨学派の「通貨原理」を批判することが、この著書の目的である、と。

論敵の通貨学派が主張する《事態の諸関係》を分かり易く図式化すれば、次のようになろう。すなわち、《通貨増発→物価騰貴→輸出減・輸入増→国際収支逆調→為替下落→地金流出→通貨収縮→物価下落→輸入減・輸出増→地金流入》。

通貨学派のこの図式を批判するために、フラートンは、金銀貨と銀行券その他の信用形態について、通貨量の増減と物価変動の関係を研究し、通貨学派の主張する因果関係があるのかどうかを検討しつつ、大凡次のような主張

を展開した。すなわち、《通貨学派は、物価変動が銀行券の伸縮によると考えるが、それは、鑄貨や政府紙幣と銀行券の流通法則を混同した謬論である；銀行券の伸縮は物価変動の原因でなくて結果であり、通貨の膨脹収縮は、取引・価格の変動の結果である；ただし、兌換通貨と違って、不換紙幣については、追加の通貨が商品にたいし新需要となりその作用が持続的である場合は、通貨量が物価に作用する場合がある》と。

フラートンは、これらの主張を、自著において次のように明記している。

「私の結論がその多くの主要点について、現世紀の生んだ経済科学の最も貴重な貢献の一つとして賞讃されてゐる『物価史』History of Prices, 1938-57¹⁶⁾の卓越せる著者〔ツークThomas Tooke〕の結論と一致してゐることによつて、その所信はますます強められていつた。」(訳, 26 頁; p.5)。

「今日次のごとき言を聞く。すなはち、金と銀行券よりなる混流通貨mixed circulationの減価を防衛するには、銀行券が常に鑄貨に兌換されることだけでは不充分である、すなはち、かゝる兌換があつても銀行券はまだ過大発行over-issuedせられる結果、その国のあらゆる商品の価格を騰貴せしめ、金の輸出を惹起する怖れがある、だから、かかる攪乱を防遏するには、銀行券流通をして純粋なる貴金属流通の場合に変動するごとく常に精密に変動せしめることが肝要であると。この命題に私は即座に賛成する。しかしながら、流通銀行券の過剰redundanceが通貨の真の兌換状態と同時的に存在し、その結果、物価を引上げ或は貴金属の流出を惹起するごとく事例があつたといひ、また真の兌換状態においてもなほ発行過多redundanceがありうるとかいふ議論を私は否定する。銀行券流通を、あたかも純粋金属流通の変動するがごとく正確に変動せしめることに関しては、先づもつて両者が異つて変動することが示されない限り、それがなぜ義務とされうるか、私はその理解に苦しむのである。なるほど、一般原則としてはそれがいかなる原因から発生するにしろ銀行券の流通の増減が、同一事情のもとにおいて金属鑄貨の示す増減と一致せねばならないことには異存はない。だが、私は、さらに

16) この「1938-57」は、原書にはなく、訳本で付加された誤記である。

一步進めて、——かゝる両者の一致は、あらねばならぬのみならず常にあると主張したい、換言すれば、紙幣の兌換が完全にしてあらゆる遅滞・障碍から守られ、鑄貨が量目純分ともに完全なる標準価値のものであり、金属の取引が鑄貨と地金を問わず絶對に自由かつ無制限である場合には、たとひイングラント銀行券の発行量を自由に放任するも、それは必ずや本位金属の供給を支配する原則と一致して変動するに相違ないのみならず、この一致が攪乱される危険こそ、まさに、目下提案されてゐるがごときかゝる人為的にして実験主義的な制限制度による干渉によつてのみ発生すると断言する。」(訳、48-49頁；pp.26-27)。

以上が、『通貨調節論』「第1章 緒論」¹⁷⁾の主要論点である。続く同書第2章～第8章において、これらの主張が詳述されている¹⁸⁾。

まず、「第2章 貨幣と信用」では各種通貨の流通の仕方が比較検討される。

第1に、金銀貨と不換紙幣の共通点と相違点が指摘される。すなわち、「金銀の価値の変動」は、「政府や社会によつては直接いかんともなし難い客観情勢に左右されている」が、「不換通貨の価値の変動は、もっぱらそれを管理する権力者の自由裁量によつて決定される」という相違点が指摘される。

「金銀の価値は、それが採掘される鉱山の生産力の多寡によつて、また時代を異にするにつれ甚しく異つてゐた、そして、これらの金銀の一定量が市場に持ち込まれるために要する費用の各々の重要な変化や、その結果としての金属の現存総量の各々のそれに対応する変化が、早晩、一般の商品価格に必ず影響を及ぼすことも疑問の余地がない。…国家の法律によつて…発行される不換紙幣および補助貨」は、「その価値が、金銀の価値のごとく、その

17) 本稿で使用する翻訳書(福田長三譯『通貨論』岩波文庫、昭和16年)の各章のタイトルは、原書(1844)にはなく、「訳者が便宜上つけ加へたもの」(訳、10頁)である。

18) 『通貨調節論』は全10章で構成されており、最後の第9章、第10章では、新銀行條例の紹介と新銀行條例に対する批判が述べられている。

数量の変化につれて変動し、あたかも商品の価格が金貨や銀貨で測定されるごとく、その変動が商品の価格に同一割合の影響をあたへるものであるから、まさに金銀と共通の範疇に属すること、これまた異論のあらう筈がない。たゞ、…金銀の価値の変動は、それを通貨として使用する政府や社会によつては直接いかんともなし難い客観情勢に左右されてゐるのに反して、慣習的な不換通貨の価値の変動は、もつぱらそれを管理する権力者の自由裁量によつて決定される」（訳、50-51 頁；pp.28-29）。

第2に、社会の発展に伴って、貨幣の「正当な代用物」「信用」が発展することが指摘される。すなわち、「社会の発展にともなひ、…信用は貨幣にたいする正当な代用物となるが、…信用と貨幣自体との間には広汎にして混合できぬ厳たる限界線が劃されている。」（訳、59 頁；p.36）。

第3に、銀行券その他の信用形態の過大発行の可能性が考察される。

まず、約束手形の「過大発行が実際に可能である」とは思わないが、仮に過大発行されるとしても、物価への影響は、銀行券の過大発行によるよりも、他の信用形態のそれによるほうが遥かに大規模であると言う。

「彼等の主張に依れば、銀行業者はその約束手形を過大発行し、通貨の数量を不相当に膨脹することによつて、商品の価格を不当に吊り上げ、物価の引き上げを通じて、外国為替をわれに不利にし、地金の流出を惹起すること、従つて、将来かゝる過大発行を防止するやうに事態が調節されるのが得策であるといふのである。これが彼等の主張の全貌である。われわれの主張は、…かゝる過大発行が実際に可能であるとする主張を拒否する点にある。だが、…現に過大発行されてゐると仮定した上でも、わわれわれは、彼等が銀行券流通の時々過剰に起因する…物価にたいする同一の影響が、他の信用形態…の過剰使用によつて遥かに一層大規模に行はれるに相違なきことを主張する。」（訳、63-64 頁；pp.39-40）。

続いて、銀行券等の過大発行がどのように物価に影響するかどうかを論じ、信用形態の相違によつて物価への影響が異なる訳ではないと主張する。

「諸君は、所謂過大発行がいかなる過程によつて物価に影響すると想像す

るか。私は、過剰の銀行券が個人の手に入り、商品市場で相互に大規模な競争を行はせしめうる時にのみそれが可能であると思ふ。物価の騰貴を馴致しうるには、たゞ銀行券が単に存在するだけでは足りない。銀行券は、それが購買者に新規の手段と動機をもたらし、ひいて需要を増大する限り、かゝる影響を誘致すると想像されるにすぎない。だから、価格の騰貴は、銀行券の過剰発行によつて、その所有者が遂行しうる支払高の増大と正比例してゐると想像されねばならないと思ふ。だが、信用流通の物価に及ぼす作用に関するこの問題が、支払の行はれる信用形態の相違によつて、あれやこれやの方法で、或は極く僅かな程度においても影響されるとは、かりそめにもいひえないことは確実である。銀行券の手段を通じてなされる時に市場価格の騰貴を惹起す支払が、為替手形の譲渡や銀行の帳簿上の相殺によってなされる時には、なんらかゝる結果を惹起さないといふ荒唐無稽な議論、すなはち、その不合理性を端的に表現するならば、与へられた信用の便宜の物価に及ぼす作用が、その取引の根本的性質とか傾向には少しも依存せずして、たゞ、信用の金額がたまたま記載されてゐる特別の紙のいかんにも依存してゐるといふがごときかゝる無鉄砲な議論——これは断じて支持されえないのである。」(64-65頁；pp.40-41)。

続いて、フラートンは、銀行券と為替手形は、共に貨幣の代用物として機能するが、前者は「需要を充足するに足る分量においにのみ造出」されるが、後者は「流通手段を供給すること以外の目的」で発行されると言う。

「銀行券は、貨幣の代用物として[のみ機能し]…、その目的にのみ需要されるのであるから、それは、需要を充足するに足る分量においにのみ造出される。…これに反して、為替手形はいずれも、銀行券と同一の機能を遂行する上で多少とも有能ではあるが、一般に為替手形が発行されるのは、他の動機にもとづき、流通手段を供給すること以外の目的にもとづいてゐる。…為替手形は、資本家から投資物として一般に需要され、多くの場合、支払日の到来するまでは最初の所持人の手を離れることがない。」(訳、66-67頁；pp.42-43)。

次の「第3章 金貨・慣習的紙幣と銀行券」では、金貨、紙幣、銀行券が過大発行された場合、物価を騰貴させるかどうかを検討される。フラートンは、「銀行券の過大発行をもつて貨幣価値の減価の原因だとする全原理は謬見delusion」（訳、82頁；p.56）であると主張する。

まず、兌換貨幣の過大発行とその結果としての物価騰貴の可能性を否定する。すなわち、「私[フラートン]の結論がその多くの主要点について、その「結論と一致している」とした『物価史』の著者「ツーク氏や彼と見解を同じくする人々が主張せんとするところは、兌換通貨は、その本質上使用に必要とされる以上に多量に発行されることなく、したがってその過剰はありえないといふにほかならない。」（訳、83-84頁；p.58）。

次に、不換政府紙幣が過大発行されると、紙幣が減価し物価騰貴が発生する可能性があることを認める。すなわち、「不換政府紙幣の過剰発行 redundant issuesが物価に及ぼす過程は、まさに鉱山の生産力の増大によつて動かされる過程に類似してゐる。」「貴金属の過多な流入 more abundant influxや慣習的通貨の濫発 redundant issuesの場合に物価の騰貴を規定する諸原理」が働く（訳、88-89頁；pp.62-63）と。

続いて、銀行券についてこの「原理」が適用されるかどうかを検討し、フラートンは、次のように主張する。

「それ自身価値あるすべての通貨と信用にもとづく通貨との間には、前者の分量が、社会的需要によつては少しも調節されないのに反し、後者のそれは、社会的需要によつてのみ調節されるといふ広汎にして明瞭な区別が存してゐる。」（訳、89頁；p.63）。

「金は、一度溶解され鑄貨となると決して再び鉱山には復帰することがない、それが世界の貨幣ストックに永久的な確定的な追加となるのはこれがためである。…輸入者がそれを保有する限り、彼にとってそれは全く儲けにならぬものである。…彼は、これを手離さんがため、彼が切望する目的物の購入にあたつては、…以前…よりもヨリ多量の金を甘んじて提供し、…その鑄貨を低減した価値で無理に市場におしつけることによつて、もとの価格では

金に需要のなかったことを証明するのである。」(訳, 89頁: pp.63-64)。

次に、不換政府紙幣の強制的な流通と銀行券の受領者側の需要による流通とを対比して、次のように言う。

「慣習的紙幣は、国民が慣習によつてこれに慣れるまでは、常に不承々々ながら受領され流通せしめられてゐるから、もしこの点について国民に選択の余地があたへられているならば、それが流通することは先づないであらう。」(訳, 90頁: p.64)。「これに反して、銀行券は受領者側の要求以外には断じて発行されない。すなはち、新金貨や新慣習的紙幣は、支払手段とされることによって市場に投げ込まれるが、銀行券は、貸付以外には決して発行されず、貸付が満期になれば、同額の銀行券は常に必ず銀行に還流する。だから、銀行券は決してその過剰redundanceによって市場を塞ぎ市場の動きを防げることも、またそれを処分せんとする人々をして値引しても支払に使用するやうにさそうことも決してありえない。銀行業者は、銀行券が充分の担保をもつて貸出されてゐるかを留意すればよい、さすれば、その還流と発行は、結局、常に相互に均衡を保つであらう。」(訳, 90頁: p.64)。

見られるように、フラートンは、銀行券の過大発行は不可能であると主張したうえで、その根拠として、銀行券の「環流の規則性」を指摘する。

「正常状態にあつて銀行券発行の過多を不可能とするものは、銀行券の金兌換よりは、むしろ還流の規則性に俟つところ大である。イングランド銀行券が、個人の即座に必要とする額以上に、多量に個人の手に入つても、もし海外に正貨を現送する必要がなければ、金と兌換するためにそれをイングランド銀行に提出するものはない。人々は、これを取引銀行に預託し同行は恐らくそれを預金としてイングランド銀行に預けるか、それとも割引市場にそれを投げ込み、イングランド銀行に不断に還流する銀行券によつて生じた空虚を満たすであらう。内国通貨の偉大なる調節原理は、この還流refluxであり、銀行制限條例中のあらゆる危険と誘惑にもかゝらず、イギリスの貨幣制度が、幸にして大陸のすべての紙幣発行が破滅を招いた全き破壊と悪化から免がれたのも実にかゝる還流の堅持によつて」である(訳, 93-94頁;

pp.67-68)。

続く「第4章 退蔵金の機能」では、冒頭、フラートンは、物価に作用を及ぼしうのような銀行券の過大発行が可能であるとする通貨主義を批判する自己の立場を確認する。すなわち、「以上において、鑄貨と兌換券とよりなる混合通貨と、純金属通貨或は純慣習的通貨とを区別する主たる特徴を述べ、あはせて、これらの各々の通貨の数量が増減する諸原理を闡明せんと努めてきた。そして、これらの原理は、物価に作用を及ぼしうるがごとき銀行業者の銀行券の過大発行が可能であるとする考へ方を全く拒否してゐることを知った」(訳、96頁；p.69)と。

そのうえで、同章の主題について、「一般物価に生じがちな攪乱」を「緩和」するという「退蔵金の機能」を指摘する。すなわち、退蔵金とされた「巨大な金銀は、鉱山の生産力の時々の不規則をば矯正し、年々の金属供給をば平準化する…。…この退蔵金の介在によつて、然らざれば一般物価に生じがちな攪乱の度合でさへ著しく緩和される」(97-98頁；pp.70-71)と。

次の「第5章 兌換通貨の流通法則」では、冒頭、「兌換銀行券の流通にはいかなる価値変動の原理があてはまるかといふ問題に立ち戻」る(訳、110頁；p.81)と宣言し、これまでの自説を確認する。

「私は、既にこの点について、兌換銀行券通貨をば純金属通貨や慣習的不換紙幣と截然と区別する諸事情を闡明にし、しかも、兌換銀行券の価値が、それが兌換される金属の価値とともに変動する以外に、いかなる価値の変動からも完全に保護され、したがつて過大発行over-issueや一時的な減価がありえないと考へる諸事情を指摘せんとしてきた。いまや、この原理が、事実の証明によつて、どの程度まで確認されるかを考察することのみが残されてゐる。」(訳、110頁；p.81)。

続けて、兌換銀行券について、フラートンは、次のように言う。

「銀行券が社会の需要以上に巨額に発行された場合に、それが流通界にとゞまりうると想像するのは、流通する銀行券の分量が、それを流通させる人々の要求にもとづくのではなしに、発行者の意志にもとづくことを是認す

ることとなるであろう。」(訳, 111 頁; p.82)。「われわれは、発券銀行がその流通高を拡大せんとする努力はなんら減退するところを知らず、また全組織は事実上絶えず力一杯に張りきられてゐて、流通を矯正し抑制せんとする反対の作用が常に働かなければ、銀行券の過剰overflowは喰ひとめえない—といふこれらの点をば、一の確固たる原理として確言できよう。…銀行券の流通高の変動が銀行の自由裁量によつて左右されるといふ主張は完全に否定されると思ふ。…銀行業者が、その顧客の受取ると思はれる銀行券の高だけすべて発行しきつてしまつた後は、全く受動的な地位にたゝされる。この銀行業者は、新規の需要が起るまではそれ以上の発行ができないのである。そして、銀行券を発行する都度、新規の需要があるとすれば、過大発行over-issue——かりそめにも物価に影響しうるやうな過剰redundanceはありえないと思ふ。」(訳, 112-113 頁; p.83)。

見られるように、フラートンは、「銀行券が社会の需要以上に巨額に発行」されてしまつた後は、銀行は受動的な立場にたち、新規の需要があるまで銀行券の追加的な発行は不可能となる、したがって「銀行券の流通高の変動が銀行の自由裁量によって左右される」ことはないと主張している。

自説を補強するため、フラートンは、「さらに他の種々なる信用形態」である「為替手形や国庫証券」の流通についても論究し、それらの過大発行の可能性を否定する。

「これらは、少しも銀行業者の自由裁量によるものでなくして、それは個人によつてしばしば交換手段として使用され、それと交換すべき価値をもつ人々によつて、常にかゝる目的に必要とされる以上に多量に保有されてゐるものである。これらの手段に関する限り、とにかく、いかなる過大発行の問題も恐らく起るものではない。…これらのものは、他の諸々の目的のために造出され、しかも、常に潤沢に存在してゐるので、通貨として過大発行されるかも知れぬといふ観念は無視されざるをえない」(訳, 114 頁; p.84)。

以上の考察を受けて、「第6章 物価の変動と通貨の分量」では、フラートンは、《物価の変動と通貨の分量の関係》という問題について、自説を全

面的に展開している。その冒頭において、次のように言う。

「次いで、物価史に視野をかへて、物価の騰落と紙券通貨の伸縮との間に存在すると主張せられる一定不変の関連を追及するならば、われわれは、物価の高低が必ず銀行券の伸縮によつて支配されるといふ臆説とは相容れない新しき矛盾contradictionsに、絶えず逢着することになるのである。」(訳, 130 頁; p.98), と。

《物価の変動と通貨の分量の関係》という問題に対するフラートンの解答は明快である。「銀行券の伸縮は、ある一定の事情のもとでは、物価の変動を惹起すと見られてゐるのであるが、実は、かゝる変動の原因でなくては、結果なのである、すなはち、それは、かゝる物価の変動に先行するのでなくて、反対にそれに追隨するのである。この真理について、ツーク氏は、最も精緻にして満足な説明をもたらしたのである」(訳, 132 頁; p.100) と主張する。ここからさらに、「通貨需要が多かれ少なかれ依存するのは物価の状態である。だから、銀行業者にたいして、物価に無頓着に銀行券の発行を命ずるのは、銀行券にたいする需要を無視して発行を命ずるのと同然である」(訳, 141-142 頁; p.108) と主張する。

「第7章 地金の流出と通貨・為替の状態」では、通貨学派が主張する《通貨増発→物価騰貴→輸出減・輸入増→国際収支逆調→為替下落→地金流出→通貨収縮→物価下落→輸入減・輸出増→地金流入》という諸現象の関連図式の重要な環をなす《地金の流出と通貨収縮・増発/為替相場の状態》の関連について検討を加えている。この問題について、フラートンは、慣習的な不換紙幣の過大供給は、為替相場の状態とは関係なく行われるが、それは結果として、金が輸出される可能性を生むと主張する。

「輸出のための地金の流出…は、通貨原理の信奉者によって、たゞ単に銀行券の過大発行の表示として、しかも、その結果としての銀行券の減価を表示するものとしてのみ観察されてゐる。」(訳, 146 頁; pp.111-112)。「鑄貨と不換紙幣がともに流通してゐる場合において、もしその混合通貨のうちの慣習的な部分が少しでも過大供給されるか、或は外国為替が逆調の際に金属

の自由輸出が法律上禁じられてゐるかすれば、その結果は、鑄貨にプレミアムがつけられるか、もし法律上それも禁じられてゐれば、金属の市価が造幣価格以上に騰貴し鑄貨が売却のために鑄潰されるか、そのどちらかが必ず起る…。…かゝる事情のもとでは、鑄貨はイギリス本位貨幣たる地位を全く失ひ、それは流通界から急速に駆逐され、その後、すべての価格と為替相場はすべて慣習的な紙幣によつて表示され、かくして、国内市場が鑄潰された地金で充満されるや否や、その残余の金ストックは諸外国へと溢れ出て、その地方で他の商品と同じく取引の目的物となる。だが、かゝる地金の輸出の過程は、明かに外国為替と関連してもゐなければ、またそれに依存もしてゐない。…為替相場が有利なのに、それでも金は輸出される」のである（訳、151-152頁；pp.115-116）。

うえて述べた「鑄貨と不換紙幣がともに流通している場合」に対して、フラートンは、「上述の事情」は、「鑄貨と兌換券とが流通する場合には、少しも作用しないことは言を俟たない。一定の量目と純分の鑄貨でいつでも兌換されうる銀行券の価値が、その兌換の対象物たる鑄貨の価値以下に著しく下落しないのは自明の理」である（訳、152頁；pp.116-117）、と言う。

これら主張の根拠を、フラートンは、トゥックの研究に求めている。「彼[トゥック氏]の研究によれば、僅に一つか二つの場合、しかもそれも満足に説明できる場合を除けば、過去半世紀間において金の流出をととなつた為替の惨落は、すべて流通手段の比較的低位なlow状態と相一致し、その反対の場合は反対の結果になつてゐたといふのである」（訳、156頁；p.120）。

ここから、フラートンは、論敵・通貨学派が主張する《通貨増発→物価騰貴→輸出減・輸入増→国際収支逆調→為替下落→地金流出→通貨収縮→物価下落→輸入減・輸出増→地金流入》という図式の重要な環をなす《地金の流入と通貨収縮・増発/為替相場の状態》の関連は存在しないことを改めて確認する。「対外支払残高の変動は、…その国の通貨が金属通貨であらうと、慣習的通貨であらうと、混合通貨であらうと免れないものであり、しかも、これらの対外支払残高の変動は、流通貨幣の数量の増減とは全く無関係であ

つて、その修正のために必ずしも地金の現送を必要としない」（訳、167頁；p.125）と。

次に、フラートンは、通貨学派の上記図式の一つの重要な環＝《通貨の増発・収縮→物価の騰貴・下落→輸入の減少・増加の関係》について批判を加える。すなわち、通貨学派の「通貨原理は二つの詭弁の上にうちたてられてゐる。すなはち、その一つは、物価が銀行券の流通高の伸縮によつて支配されるといふ点であり、その二は、適度の物価の下落は、海外に自国商品の市場をきり開く必要条件であるといふ点である。だが、物価に作用する[通貨の]収縮は、発行高の収縮ではなくして融通の収縮である」（訳、173頁；p.130）、と言う。

さらに、フラートンは、通貨学派の図式のもう一つの重要な環＝《地金流出と物価下落の関係》についても批判を加える。すなわち、「たとひ諸商品の価格が流通手段の分量によつて全く調節されることが明白な真理であるにしても、輸出向の地金の流出が物価に影響を及ぼすこととはならないであらう。かゝる流出は、一般に流通界にある通貨に作用するのではなくして、準備金としての通貨——すなはち退蔵金に作用するものである」（訳、174－175頁；p.131）、と言う。要するに、フラートンは、地金の流出は「流通界にある通貨」には作用せずに、「退蔵金に作用」するだけであり、「物価に影響を及ぼす」ことはない、と言うのである。

次に、「第8章 地金の流出の諸原因とその意義」では、冒頭、「金の流出を阻止しうる手段は、果して存しないのであらうか、それとも、かゝる手段を講ずることは許されないで、かゝる場合にわれわれは拱手傍観のまゝ、イングランド銀行を天佑に委ねなければならないのであらうか」（訳、182；p.138）と述べ、あるいは、「さて、地金の流出を努めて阻止せんとすることが、果して実行できるかどうか、また、それが得策であるかどうかといふ問題に立ち帰らう」（訳、185頁；p.140）と問題設定して、以下、《地金の流出とその対策》という問題の考察を進めていく。

まず、フラートンは、「イングランド銀行が物価を強力に左右し、しかも

金の流出を逆行せしめる力さへもつてゐる」とすれば、それはどのような場合かを考察する。彼の答えはこうである。それは、「銀行券の発行高」の制限ではなく、「手形割引を拒絶」することによって可能となる；大事なのは「貸付の拒絶」である（訳、185-186頁；p.141）、と主張する。

しかし、続けて、フラートンは、「貸付の拒絶」による信用の収縮策が地金の流出を抑制するという政策の限界を指摘する。すなわち、「イングランド銀行がその融通を拒絶することによって、信用にたいして有力に作用するのは、すべての場合でもなければ、またあらゆる事情のもとにおいてでもない。…信用の収縮は、たとひそれが安全かつ有効に行はれうる場合ですら、一般的な完全な地金流出の救済策たりえないのである。…かくのごとき矯激な手段でも、もし適当な時期にとられるなら、イングランド銀行は地金の流出を呼び戻すことに先づ奏功するだろう…。だが、かかる信用の収縮策は、常に誠めなければならぬ方策の一つである」（訳、186頁；p.141）。「外国証券へ投資するといふ慣習が、イギリスに普及して以来、イギリスの為替機構の上に新しい要素が加はつてきた。すなはち、対外負債の償還に必要とされる資本は、金や商品の形態におけると同様に市場性のある証券の形態でも移送されうることとなつた。しかして、かゝる証券の価格は、市場金利の変動につれて騰落…するから、金利の変動は、為替の調節上や、重要な手段」となり、「イングランド銀行は、同行が市場金利を統制しうる範囲内において、同行の金庫から引き出される地金流出を阻止するために、この金利政策を自由自在に利用してきた」が、「この目的達成のためイングランド銀行のとるこの手段は、一般に想像されてゐるよりも限られてゐる」（訳、187頁；p.142）。「信用と物価についてと同様に、市場金利に関しても、イングランド銀行の威光が幅をきかすのは、公衆がイングランド銀行にたいして依存状態におかれる時期に限つてゐる」（訳、188頁；pp.141-142）。

この「地金の流出」対策問題に対するフラートンの基本的な考えは、地金流出阻止の特効薬はないということである。すなわち、「だから、一般的にいつて、貴金属の流出を停止せしめたり修正せしめたりする点で、われわれ

が全幅の信頼をかけうるやうな確実な手段が、いまだ発見されてゐないことだけは極めて明かである」(訳, 189 頁; p.144)。だから、もし対抗策があるとするば、イングランド銀行においてより大量の地金を準備金として保有する以外にないと言う。すなわち、「だから、もしイングランド銀行がどうか堪へられるだけの巨額の富をもつて、地金の還流の時期の到来するまで地金の流出に堪へうることさへできれば、…恐慌を殆んど克服しうる…。…イングランド銀行の地金のストックを増大し節約するための手段を発見し、イギリスの通貨をより広汎な土台の上に樹立するための方策を立案する方へ考察を向けるならば、通貨安定のためにも、通貨本位の安全のためにも、社会の静穏と繁栄のためにも貢献するところが尠くないであらうと思はれる」(訳, 190-191 頁; pp.145-146) と言う。

第8章前半部分における《地金の流出とその対策》についての議論の後、フラートンは、同章後半部分において、一見それまでと同じように、地金流出の問題を論じながらも、次第に本稿テーマの「資本の過多」論に関わる方向へと議論を転換させていくことになるが、そこでの彼の議論の分析作業に入る前に、以上見てきたフラートン著『通貨調節論』第1章～第8章前半におけるフラートンの通貨論の内容を、ごく簡単にまとめておくことにしよう。

『通貨調節論』の目的は、そのサブタイトルに明記されているように、「イングランド銀行および全国の諸銀行の銀行券発行高を将来一定限度内に制限せんとする提案の基礎たる通貨原理にたいする一検討」を行うことであり、これによって、《銀行券の過大発行が物価騰貴の原因であるとし、それを防ぐために銀行券発行総量を一定限度内に制限しようとする通貨学派(currency school)の提案》とそれに基づくいわゆる<ピール銀行条例案>を批判することにある。批判対象たる条例案の基礎理論となっている通貨学派の「通貨原理」を批判することが、フラートンの著書の目的である。

論敵である通貨学派の主張を図式化すると次のようになる。《通貨増発→物価騰貴→輸出減・輸入増→国際収支逆調→為替下落→地金流出→通貨収縮

→物価下落→輸入減・輸出増→地金流入》。この図式を批判するために、フラートンは、金銀貨の流通量や銀行券等の信用形態の流通量と物価の騰落の関係を解明する作業を行い、次のように主張する。《通貨学派は＜物価変動は銀行券の伸縮に依る＞と考えるが、それは、鑄貨・政府紙幣と銀行券の流通を混同した謬論である。銀行券の流通量の伸縮は、物価変動の原因でなくて結果であり、通貨量の膨脹・収縮は、商品の取引量や価格変動の結果である》と主張する。このフラートンの主張は、端的に次のように説明されている。「私の結論がその多くの主要点について、現世紀の生んだ経済科学の最も貴重な貢献の一つとして賞讃されてゐる『物価史』History of Prices, 1838-57の卓越せる著者〔ツークThomas Tooke〕の結論と一致してゐることによって、その所信はますます強められていつた」（訳、26頁；p.5）、と。

このフラートンの基本的立場は、次の記述に明確に読み取ることができる。

「銀行券の過大発行をもって貨幣価値の減価の原因だとする全原理は謬見」（訳、82頁；p.56）である。「兌換通貨は、その本質上使用に必要とされる以上に多量に発行されることなく、したがってその過剰はありえない」（訳、83-84頁；p.58）。「それ自身価値あるすべての通貨と信用にもとづく通貨との間には、前者の分量が、社会的需要によつては少しも調節されないのに反し、後者のそれは、社会的需要によつてのみ調節されるという…明瞭な区別が存してゐる」（訳、89頁；p.63）。後者の「銀行券は受領者側の要求以外には断じて発行されない。すなはち、新金貨や新慣習的紙幣は、支払手段とされることによつて市場に投げ込まれるが、銀行券は、貸付以外には決して発行されず、貸付が満期になれば、同額の銀行券は常に必ず銀行に還流する。だから、銀行券は決してその過剰によつて市場を塞ぎ市場の動きを防げることも、またそれを処分せんとする人々をして値引しても支払に使用するやうにさそふことも決してありえない。…したがって、かく制限されている以上、そこにはなんの過剰もありえない」（訳、90-91頁；pp.64-65）。「兌換銀行券の価値が、それが兌換される金属の価値とともに変動する以外

に、いかなる価値の変動からも完全に保護され、したがって過大発行や一時的な減価がありえないと考へる」(訳, 110 頁; p.81)。銀行券以外の「他の種々なる信用形態, すなはち, 為替手形や国庫証券」は、「いかなる過大発行の問題も恐らく起るものではない」(訳, 114 頁; p.84)。「通貨需要が…依存するのは物価の状態である。…銀行業者にたいして, 物価に無頓着に銀行券の発行を命ずるのは, 銀行券にたいする需要を無視して発行を命ずるのと同然である」(訳, 141-142 頁; p.108)。

V. 『通貨調節論』におけるフラートンの「資本の過多plethora」論

『通貨調節論』「第1章 緒論」～「第8章 地金の流出の諸原因とその意義」前半において, フラートンは, 通貨学派の「通貨原理」を批判するために通貨に関わる自説を展開してきたが, しかし, 同著第8章の前半部分で『地金の流出入と為替相場・通貨量の関係』を考察したのち, 少しずつ議論の方向を転換させ, やがて「資本の過多」に関わる議論の方へと進んでいくことになる。

議論の方向の転換は, 筆者の見るところ, 「第8章 地金の流出の諸原因とその意義」後半の次の箇所から始まっていくように思われる。すなわち, その箇所で, フラートンは, 「叙上のごとき地金の流出, すなはち, われわれが全く統御できないし, また, たゞその需要を充たすことによつて解決される正貨の需要のほかに, なお対外支払残高の逆調にもとづく頗る巨額にして重要な地金の流出の項目がある」が, 「この種の地金の流出のうちで, 先づ第一にあげられるものは, 外国穀物を大量に買入れるための地金の流出である」(訳, 196 頁; p.149)と述べ, 以下, 議論の方向を転換させていく。

これに続いて, この「外国穀物の大量購入」による地金の流出以外に, 地金の流出が生じる場合があることを指摘し, それらの地金の流出問題へと進んでいく。すなわち, 「以上のほかに, なお論及すべき重要な地金の流出の二つの場合が残ってゐる——すなはち, その一は, 外国証券への大規模な資本の投下によつて対外負債が発生した場合に起るものであり, 他は, 投機と

過大貿易とにもとづいて弊害が生じた場合に起るものである。この二種の地金の流出は、その起原の理非曲直に関して、穀物の購入とか戦費の目的のための流出とは全くその趣を異にし、これらの場合と同様に寛大に処理さるべき資格を全然もたないものである。のみならず、穀物購入のための地金の流出には、必要とされる数量についても、また獲得されうる数量についても、自然的な一定の限度がある。また戦費も、なるほど濫費に陥りやすいとはいふものの、その額も政府の判断と手腕によつて常に左右されるに違ひない。だが、資本が外国投資にしばしば濫費される規模には、殆んどこれといつてあげうるやうな限度がなく全く無際限である。」(訳、201頁；pp.160-161)。

ここで、フラートンは、「外国からの穀物の購入による地金の流出」とか「戦費の目的のための地金の流出」とは全く違って、「外国証券への大規模な資本の投下」によって対外負債が発生した場合に生じる地金の流出がいかに大きな弊害を伴うかを指摘している。すなわち、穀物購入による地金の流出には「数量」に「自然的な一定の限度」があり、また、戦費の支出のための地金の流出の場合には、その額は「政府の判断と手腕によって常に左右される」、したがって、これら地金の流出には数量や額に自ずと限度がある、ところが、外国証券への資本投下に起因する地金の流出には、「濫費される規模には、殆んどこれといつてあげうるやうな限度がなく全く無際限である」と言うのである。

とはいえ、これら地金流出は、むやみに難詰されるべきではなく、場合によっては「頗る有益であるかも知れない」(訳、202頁；p.155)と言う。というのは、こうである。

まず、「国外証券への投資」は、国内の過剰資本の重要な捌け口となり、また、外国産業からの所得獲得によって、社会に富と繁栄を齎らすので、「頗る有益」でもあると言う。すなわち、「外国証券への投資は、国内市場の提供する資本のための有利な運用口の直接的な包容力以上に超過する国内資本の過剰部分 (overflowings of domestic capital, which exceed the immediate capacity of advantageous employment offered by the home-market) にと

つて、しばしば便利にして重宝な捌け口となるものであり、…その配下にある外国の産業からの所得を獲得してゆくことによつて、一社会の富と繁栄が促進される」（訳、202 頁；p.155）からである。

また、「生産物の投機的購入」などの「投機」は、投機対象の予想される需給ギャップを調和・調整することによって「急激な転換を緩和する効果」をもつ（訳、203 頁；p.155）からである。

ただし、「投機を誘引する諸事情」に「異常な信用の便宜」が加われば、「効果」を期待するところではないと言う（訳、203 頁；pp.162-163）。こうして、有益な「効果」があると言って済ませられない事態・「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」に、フラートンは、問題関心を向けていき、まず、「熱狂的な投機心と冒険心」の背景にある事態を次のように指摘する。

「熱狂的な投機心と冒険心a wild spirit of speculation and adventureは、必ずしも市場金利の久しきにわたる低落によつて促進されるものではなくて、むしろ、…投機的興奮speculative excitementの激しい発作の根底には、資本にたいして安全にしてしかも生産的な投資口を見出すことの困難が横たはつてゐるというふこと——これこそ一つの真理」である（訳、210 頁；p. 161）。

こう述べて、以下、フラートンは、『「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」の背景にある「国内市場の提供する資本のための有利な運用口の直接的な包容力以上に超過する国内資本の過剰」・「資本の過剰供給」がどのように発生するか』という問題を論じていく。すなわち、「私は、こゝで、資本の過剰供給over-supply of capitalごときことが果たして可能であるか否かについて、経済学者間にかくも多く論争されてきた抽象的な問題に深く立ち入らないが、…敢て次のことは断言できると思ふ、すなはち、イギリスの現社会機構のもとにおいては、所得からの年々の貯蓄と植民地からの不断に現送される巨額の財宝（the annual savings from income and the large fortunes in constant course of remittance from the colonies）によつて、生産的な投資口を追求する資本の分量（the amount of capital seeking productive

investment) が正常時において急速に集積され (accumulates), それを有利に利用する手段の増大と甚しく均衡を失してゐることこれである。」(訳, 211 頁; p.162)。

見られるように、ここで、フラートンは、「所得からの年々の貯蓄と植民地からの不断に現送される巨額の財宝」によって「生産的な投資口を追求する資本」が急速に蓄積されるが、「それを有利に利用する手段」＝「投資口」がそれほど増大しないため、「資本の過剰供給」が発生するという事態の発生を明確に指摘している。

ここから先、フラートンは、「資本の過剰供給」がどのように発生し、どのように資本の過剰供給の事態がピークに到達し、その結果として発生する「資本の過多」がどのように破壊され、そして最後に、どのようにして「健全な状態」が回復するか」という事態の推移を説明している。

すなわち、「公債」のような「安全と便宜の点で、人気のある投資物」は、数量は容易に「増加しないか、それとも漸次に減少」するため、「新規資本がそれに投資」されれば、「公債の価格は不可避免的に騰貴」する。「しかし、証券価格の騰貴は市場金利の下落と同一である。…政府はその長期公債の利子を軽減することができ、土地所有者はより有利な条件でその抵当を更改することができる。しかし資本家は…[この場合]事態の好転を期待して数年間は待つが、遂に忍耐を失つて従前の地位を挽回せんと夢中になるあまり、彼の貨幣により多くの報酬の期待しうる計画を貧ごとく傾聴するに至る。かくして、目前に展開されてゐるすばらしい儲け口の幻想に眩惑され」ることになる。「かゝる際には、成功せる二・三の企業の事例だけで、彼に無法図 (the most absurd hopes) な希望を喚起さすに充分である。やがて、この迷想は、証券市場から商品市場へと蔓延する。すべての商品は、いまや消費とか供給の状態には全く無頓着に投機的購入の目的物となる。かくして、…際限なき信用がしばしば最も価値なき計画の助勢のために惜し気もなく消費される。すべてのものは、…膨れ上つたやうな外観を呈するが、物価の不自然な騰貴によつて、遂に為替が影響をうけ、地金が海外に現送されるに至る

と、パニックが起り、その泡沫企業は破綻し、それと同時に資本の破壊が始まるが、この資本の破壊の結果として金融市場を圧迫してゐた重荷は一時取り除かれ、競争は緩和され、金利はその下落しない以前の水準まで回復するのである」(訳、211-212頁；pp.162-163)。

以上見られるように、フラートンは、『資本の過剰供給』事態の発生→「資本の過剰供給」事態のピークへの到達→「資本の過多」の破壊→「健全な状態」の回復」という事態の推移を説明したのち、「資本の過剰供給」事態の解消＝「[[過剰]資本の破壊」が果たす積極的な役割を確認している。すなわち、「これらの恐るべき資本の破壊も、その実は、成長しすぎて脹れ上つた豊満状態にたいする自然的にして必然的な矯正物——換言すれば現に組織されてゐるやうなイギリスの社会制度が、それによつてその存立を脅かす絶間なき過剰plethoraを常に一掃し、健全なる状態を取り戻しうるところの矯正力vis medicatrix以外のなにものでもない」(訳、214-215頁；p.165)、と。

ここでの記述で注目すべきは、フラートンは、「[[資本の]過多plethora」(訳本では「過剰」という用語を、『通貨調節論』のこの箇所だけに、そしてこの一度だけ使用している、ということである。そして、われわれとしては、マルクスが、自身が執筆中の草稿で「資本の過多」という用語を使用し始めたときに(「1861-63年草稿」ノートXVI記載の草稿「第3章 資本と利潤」において)、明らかに、この箇所を指示して、「フラートンを見よ」と記したということを確認することができるのである。

議論の流れを見失わないために、ここでもう一度、「第8章 地金の流出の諸原因とその意義」の議論の大きな流れをまとめておくと、次のようになる。第8章前半部分において様々な「地金の流出」に関わる問題の考察→第8章後半において《それ以外の地金流出の原因の重要事項として国外への投資に伴う地金の流出問題》を指摘し、それ以後、《国外への投資の背景にある国内の資本の過剰供給問題》を考察→《過剰資本の破壊による「健全な状態」の回復》過程の考察等、事態の推移の説明が進められてきた。そ

して、この議論の最終段階において重要なキーワードとして[資本の]過多plethoraという用語が使用されているのである。

本稿の目的に照らして、再度確認しておくべきは、フラートンが「資本の過多plethora」が何故に・如何に発生すると考えていたのかという点である。フラートンは、「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」を引き起こしたのは、「市場金利の久しきにわたる低落」ではなく、「国内市場の提供する資本のための有利な運用口の直接的な包容力以上に超過する国内資本の過剰」・「資本の過剰供給」であると考えていた。すなわち、「所得からの年々の貯蓄と植民地からの不断に現送される巨額の財宝」によつて、生産的な投資口を追求する資本の分量」が急速に蓄積されるにも拘わらず、「それを有利に利用する」投資口がそれほど増大しないために「国内資本の過剰」が発生するからこそ、そのはけ口を求めて、「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」が引き起こされると見ていたのである。

要約すれば、フラートンは、事態の推移を、《「所得からの年々の貯蓄と植民地からの不断に現送される巨額の財宝」の集積→「生産的な投資口を追求する資本」の蓄積→「国内市場の提供する資本のための有利な運用口の直接的な包容力以上に超過する国内資本の過剰」・「資本の過剰供給」の累積→「すばらしい儲け口の幻想」に基づく「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」→「資本の過多plethora」事態の発生》というプロセスによって説明しているのである。

Ⅵ. フラートンの「資本の過多」論からマルクスの「資本の過多」論へ

「資本の過多」状態を巡る事態の推移についてのフラートンの説明は、筆者の見るところ、マルクスにおける「資本の過剰生産」・「資本の過多」についての議論の仕方や内容が引き継がれているものがあるのではないかと思います。というのは、マルクスの「資本の過多」に関わる叙述には、大局的に見て、フラートンとそれと同じような説明内容になっていると思えてならない記述が幾つも散見されるからである。たとえば、以下のような記

述が存在する。

①「それでは、このような一般的利潤率の低下傾向は何が原因で生じるのか？この問題に答える前に、われわれは、この低下傾向がこれまでブルジョア経済学の大きな不安の種になってきたことを指摘しておくことができる。リカードウ学派やマルサス学派の全体は、この過程がひき起こすにちがいないであろう最後の審判の日のために悲痛な叫び声をあげている。というのは、資本主義的生産は利潤の生産なのだから、この利潤が減少するにつれてその生産の刺激やその生産の生き生きとした魂を喪失することになるからである。これにたいして、他の経済学者たちは、負けず劣らず特徴的ないろいろな慰めになる理由をこれまでにもちだしてきた。ところが、理論と並んで実際に現われるのは、資本の過剰（superabundance of capital）から生ずる恐慌であり、または同じことになるが、利潤率低下の結果として資本が踏み込む無謀な冒険である。このことから、恐慌が、——フラートンを見よ——資本の過多（^{プレトラ}plethora of capital）を救済して健全な利潤率を回復するために必要な暴力的手段として認められている恐慌が、起こるのである」¹⁹⁾。

②「こうした利潤率の低下につれて、労働を生産的に充用するために一般に必要とされる資本の最小限——または資本家の手になければならない高さの生産手段の集積——は増大する。この最小限は、労働を搾取するためにも、また、ただ生産物を生産するために社会的に必要とされる必要労働時間を充用するためだけでも、必要なのである。それと同時に蓄積も、すなわち集積も増大する。というのは、利潤率の低い大資本のほうが利潤率の高い小資本よりも急速に蓄積を進めるからである。この増大する集積は、それ自身また、ある一定の高さに達すれば、再び利潤率の新たな低下をひき起こす。そのために、より小さな分散した諸資本の大群はわれ先に冒険〔の道へ駆り立てられる〕。このために恐慌〔へと追いこまれる〕。いわゆる資本の過多（Die s. g. Plethora des Capitals）は、いつでもただ、利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本の過多（Plethora von Capital）にだけ関連して

19) MEGA II-3-5, S. 1633 : 草稿集⑧145 頁。

いる。(フラートンを見よ。)²⁰⁾。

④「利潤率の低下につれて、労働の生産的充用のために個々の資本家の手になければならない資本の最小限は増大する。…それと同時に集積も増大する。この最小限は、労働の搾取一般のためにも、また充用労働時間が商品の生産に必要な労働時間であるためにも、すなわち充用労働時間が商品の生産に社会的に必要な労働時間の平均を越えないためにも、必要である。それと同時に集積も増大する。なぜならば、ある限界を越えれば、利潤率の低い大資本のほうが利潤率の高い小資本よりも急速に蓄積を進めるからである。この増大する集積は、それ自身また、ある高さに達すれば、利潤率の新たな低下をひき起こす。したがって、分散した小資本の大群は冒険の道に追いこまれる。投機、信用思惑、株式思惑、恐慌へと追いこまれる。いわゆる資本の過多は、つねに根本的には、利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本—そして新たに形成される資本の若枝はつねにこれである—の過多に、または、このようなそれ自身で独自に行動する能力のない資本を大きな事業部門の指導者たちに（信用の形で）用だてる過多に、関連している。このような資本過多は、相対的過剰人口を刺激するのと同じ事情から生じるもの…である。といっても、…一方には遊休資本が立ち、他方には遊休労働者人口が立つのであるが²¹⁾」。

上掲引用文①の内容を纏めてみると、次のようになろう。《リカード学派やマルサス学派は、利潤率低下過程がひき起こす最後の審判の日のために悲痛な叫び声をあげ、他の経済学者たちは、それに対して負けず劣らず特徴的ないろいろな慰めになる理由をもちだしてきたが、実際に現われるのは、資本の過剰（superabundance of capital）から生ずる恐慌であり、利潤率低下の結果として資本が踏み込む無謀な冒険である。フラートンが言うように、恐慌は、資本の過多（^{プレthora}plethora of capital）を救済し健全な利潤率を回復するために必要な暴力的手段である。》

20) MEGA II-3-5, S. 1640 : 草稿集⑧158頁。

21) MEGA II-4-2, S. 324-325 : MEW, Bd. 25, S. 261:『資本論』（6）、409-410頁。

上掲引用文②を纏めてみると、次のようになろう。《利潤率の低下につれて、資本の最小限は増大する。同時に集積も増大する。増大する集積は、ある一定の高さに達すれば、再び利潤率の低下をひき起こす。より小さな分散した諸資本の大群は冒険〔の道へ駆り立てられる〕。このために恐慌〔へと追いこまれる〕。いわゆる資本の過多（Die s. g. Plethora des Capitals）は、利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本の過多（Plethora von Capital）に関連している。》

上掲引用文④の内容を纏めてみると、次のようになろう。《利潤率の低下につれて、資本の最小限は増大する。同時に集積も増大する。増大する集積は、ある高さに達すれば、利潤率の新たな低下をひき起こす。したがって、分散した小資本の大群は冒険の道に追いこまれる。投機、信用思惑、株式思惑、恐慌へと追いこまれる。いわゆる資本の過多は、利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本の過多に関連している。》

以上3つの論述部分（引用文①②④）は殆ど同じ内容であると見ることができよう。しかも、その内容は、フラートン著『通貨調節論』第8章後半部分の議論の内容を彷彿させるものがあるように思われる。

『通貨調節論』第8章の後半部分の議論の内容は、次のように図式化し理解することができよう。《「所得からの年々の貯蓄と植民地からの不断に現送される巨額の財宝」の蓄積→「生産的な投資口を追求する資本」の集積→「国内市場の提供する資本のための有利な運用口の直接的な包容力以上に超過する国内資本の過剰」・「資本の過剰供給」の累積→「すばらしい儲け口の幻想」に基づく「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」→「資本の過剰plethora」事態の発生》。

この図式の前半部分＝《「所得からの年々の貯蓄と植民地からの不断に現送される巨額の財宝」の集積→「生産的な投資口を追求する資本」の蓄積→「国内市場の提供する資本のための有利な運用口の直接的な包容力以上に超過する国内資本の過剰」・「資本の過剰供給」の累積》について言えば、それと同じ主旨の議論をマルクスの論述のなかに見出すとすれば、《利潤率の低

下につれて、資本の最小限は増大する。と同時に資本の集積も増大する。増大する資本の集積は、ある高さに達すれば、利潤率の新たな低下をひき起こす」という内容の議論として引き継がれ、「再現」されていると見ることができるのではなかろうか。

また、図式の後半部分＝《「すばらしい儲け口の幻想」に基づく「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」→「資本の過剰plethora」事態の発生》について言えば、それと同じ主旨の議論をマルクスの論述のなかに見い出すとすれば、《分散した小資本の大群は冒険の道に追いこまれる。すなわち、投機、信用思惑、株式思惑、恐慌へと追いこまれる。いわゆる資本の過多という事態は、利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本の過多に関連して発生するのである》という内容の議論として引き継がれ、「再現」されていると見ることはできるのでなかろうか。

このように見てくると、マルクスが「資本の過多」という用語を使用し始めた際、「フラートンを見よ」という指示文言をわざわざ残しているのは、単に自分が使用した文言の借用・継承関係を示すだけの意味ではないと見なければならぬ。フラートンから、単に用語を借用しただけではなく、その議論の展開の仕方・内容、あるいは、資本の過多の発生に至る事態の推移の説明順序についても、引き継いでいるように思われてならないのである。

(まつお・じゅん／経済学部特任教授／2016年7月20日受理)

Sources of Marx's Concept of "Plethora of Capital"

MATSUO Jun

Chapter 15 of Volume III Part III: "Excess Capital and Excess Population" in the published edition of *Das Kapital* contains the theory of "overproduction of capital," which presents the most important key to understanding Marx's methodology in the development of his theory of crisis. In a previous paper²²⁾, I examined Marx's elaboration of the concept of "plethora of capital" in the process of writing *Das Kapital* and its preliminary manuscripts, a term that he repeatedly refers to in connection with the concept of the "overproduction of capital."

In this previous paper, I directly approached the question of what is meant by "plethora of capital," a concept repeatedly alluded to in Marx's discussion of the "overproduction of capital." In researching my previous study, numerous related points meriting further investigation emerged were not pursued in the interest of narrowing the focus of the study. Instead, the study concentrated on determining the process by which the concept of "plethora of capital" was formed in *Das Kapital* and its preliminary manuscripts by following Marx's own exposition (descriptive passages).

The purpose of the present paper is to uncover leads in elucidating the sources and origins of the concept of "plethora of capital." This I believe will prove instrumental in understanding from whom and from where the term "plethora of capital" was derived, as well as the purpose for which Marx adopted the concept of "plethora of capital."

The first step in this study will be to briefly confirm how Marx began to use the term and concept of "plethora of capital" in *Das Kapital* and its

22) Matsuo Jun, "The Formation of Marx's Concept of 'Plethora of Capital,'" *Keizai Keiei Ronshu* (Momoyama Gakuin University), Vol. 54, No. 2 (October 2012).

preliminary manuscripts. Given that Marx refers to and uses the term and concept of “plethora of capital” in numerous places in *Das Kapital* and its preliminary manuscripts, I will focus on examining the content of those passages that indicate from whom Marx borrowed this term and what discussion he was carrying forward by doing so.

Marx's first use of the term “plethora of capital,” not as a quotation of other sources but as part of his own exposition, appears in the manuscript of “Drittes Capitel. Capital und Profit” appearing in Note XVI of the “Manuscripts of 1861–1863.” In addition to this, the term “plethora of capital” is used in numerous places in *Das Kapital* and its preliminary manuscripts. Examples of this are found on page 105 of the manuscript of “Drittes Capitel. Capital und Profit” in Note XVI of the “Manuscripts of 1861–1863,” page 707 of Note XIII appearing in Notes VI ~ XV in the abovementioned manuscript, page 231 of the manuscript of Volume III of *Das Kapital* (corresponding to the beginning passage of Volume III Part III Chapter 15 Section 3 of Engel's edition of *Das Kapital*), and page 340 of the manuscript of the Chapter 5 of the abovementioned manuscript.

Among the above passages, the first three name John Fullarton as the source from whom the term “plethora of capital” was borrowed and adopted. In the remaining two passages, the term “plethora of capital” is predicated with the expression “so-called” (Die s. g.). As is well known, the expression “so-called” is interjected to denote that the term being used does not originate in or is not the creation of the author himself. Marx's use of the expression “so-called” is intended to explicitly denote that the term “plethora of capital” did not originate with him and was not his own creation.

Marx names John Fullarton when using the term “plethora of capital.” It is clear that when he began using the term “plethora of capital,” Marx was borrowing and adopting this term from Fullarton. The crux of the problem of the present paper is to investigate the question of from what discussions and expositions of Fullarton did Marx extract and adopt the term and concept of “plethora of capital.”

In the notes to MEGA Abt. III Bd. 3 Teil 5, the editors of MEGA identify

the passage in the writings of Fullarton that contains discussions of “plethora of capital.” Even without referring to this note, a direct review of Fullarton’s *On the Regulation of Currencies* immediately and definitively yields Fullarton’s passage from which Marx borrowed and began to use the term “plethora of capital.” That is to say, the following is the single instance in which Fullarton employed the term “plethora of capital.”

“The periodical destruction of capital has become a necessary condition of the existence of any market rate of interest at all. And, considered in that point of view, these awful visitations, to which we are accustomed to look forward with so much disquiet and apprehension, and which we are so anxious to avert, may be nothing more than the natural and necessary corrective of an overgrown and bloated opulence, the *vis medicatrix* by which our social system, as at present constituted, is enabled to relieve itself from time to time from an ever-recurring plethora which menaces its existence, and to regain a sound and wholesome State.” John Fullarton, *On the Regulation of Currencies, etc.* (London, 1844), p.165.

It is clear that “plethora” as used in the above passage is the source from which Marx borrowed the term and concept “plethora of capital.” The problem that remains is to determine how this term was employed by Fullarton in the context of his discussions.

For this purpose, I will undertake to examine the themes that Fullarton discussed and developed throughout his book *On the Regulation of Currencies*, and to investigate why and how expositions extrapolating from these discussions using the term “plethora” were developed. This will be done by tracing the course of Fullarton’s exposition.

On the Regulation of Currencies consists of ten chapters, the first seven of which present Fullarton’s own basic positions on currency. A discussion containing the term “plethora” appears in the latter portion of “Chapter VIII : Causes and Importance of Drains of Bullion” The contents of the latter portion of Chapter VIII can be schematized as follows. The accumulation of “annual savings from income and the large fortunes in constant course of remittance from the colonies” → accumulation of “the amount of capital seeking productive investment” → accumulation of “over-

flowings of domestic capital, which exceed the immediate capacity of advantageous employment offered by the home-market” and “over-supply of capital” → “splendid visions of gain” based on a “wild spirit of speculation and adventure” and “speculative excitement” → give rise to the condition of “plethora of capital.”

If the first part of this schema (accumulation of “annual savings from income and the large fortunes in constant course of remittance from the colonies” → accumulation of “the amount of capital seeking productive investment” → accumulation of “overflowings of domestic capital, which exceed the immediate capacity of advantageous employment offered by the home-market” and “over-supply of capital”) were to be identified and located in Marx’s expositions, we can posit that it can be found to have been adopted and “reproduced” in the following passage. “As the profit rate falls, so there is a growth in the minimum capital... Concentration grows at the same time... This growing concentration leads in turn, at a certain level, to a new fall in the rate of profit.²³⁾”

If the latter part of this schema (“splendid visions of gain” based on a “wild spirit of speculation and adventure” and “speculative excitement” → gives rise to the condition of “plethora of capital”) were to be identified and located in Marx’s expositions, we can posit that it can be found to have been adopted and “reproduced” in the following passage. “The mass of small fragmented capitals are[sic] thereby forced onto adventurous paths : speculation, credit swindles, share swindles, crises. The so-called plethora of capital is always basically reducible to a plethora of that capital for which the fall in the profit rate is not outweighed by its mass.²⁴⁾”

Marx’s exposition in Chapter 15 Section 3 of Volume III Part III of *Das Kapital* is as follows. “As the profit rate falls, so there is a growth in the minimum capital... Concentration grows at the same time... This growing concentration leads in turn, at a certain level, to a new fall in the rate of profit. The mass of small fragmented capitals are[sic] thereby forced onto adventurous paths : speculation, credit swindles, share swindles, crises. The

23) Karl Marx, *Capital* Volume III, Penguin Books, 1981, p.359.

24) Karl Marx, *ibid.*, p.359.

so-called plethora of capital is always basically reducible to a plethora of that capital for which the fall in the profit rate is not outweighed by its mass.²⁵⁾”

When first using the term “plethora of capital,” Marx goes to the trouble of appending the instruction “see Fullarton.” Considered in the above light, the purpose of this appended instruction should be seen to exceed the intent of merely indicating the source from which he was borrowing and adopting this term. Marx went well beyond borrowing a term from Fullarton, and it can be argued that he also adopted the method and contents of how Fullarton developed his arguments, as well as the order in which he explained the emergence of the “plethora of capital.”

25) Karl Marx, *ibid.*, p.359.